

志賀理江子、メルツバウ×バラージ・パンディ(ハンガリー)、
リシャル・ピナス(フランス)

『メルツバウ、バラージ・パンディ、 リシャル・ピナス with 志賀理江子「Bipolar」』 第1回報告書〈事業の立ち上げ〉

森山直人

本企画はKYOTO EXPERIMENT(京都国際舞台芸術祭、以下KEX)のプログラム(Shows)として企画され、「国際交流プロジェクト」としての性格もこの前提上に立っている。参加アーティスト同士の具体的な作業だけでなく、企画者サイドが出発点で提出したコンセプトも、プロセス全体において重要な意味を持っているといえる。

したがって、まず本レポートでは、上記2点を中心に報告しておきたい。

企画者サイドの意図

2022年7月22日に、KEX共同ディレクターである塚原悠也、川崎陽子、ジュリエット・礼子・ナツ各氏に、オンラインインタビューを行った。

- (1) 企画の萌芽は、2019年の夏頃に、3人が前任者(橋本裕介氏)からフェスティバルのディレクターを引き継ぐことが決まった時期に生まれた。それまでのプログラミングのなかに、①舞台芸術と「音楽」、②歴史的なアーティストの紹介、があったことを考慮した時、すぐに浮上したのがメルツバウと志賀理江子の組み合わせだったという。
- (2) 塚原氏は、2010年にはじめて志賀氏と出会って以来、さまざまな形で交流を深めていた。志賀氏は子ども時代にバレエに打ち込んだ経験があり、英国留学時代に前衛的な舞台芸術にも親しんでいた。彼女の写真作品には他者を巻き込む力や身体性への関心が現れている。塚原氏の提案を3人で議論し、招へいを決めた。
- (3) メルツバウは、これまで国外のミュージシャンとの協働作業を数多く行ってきている。本企画の国外ミュージシャンに関しては、さまざまな候補があったが、コロナ禍の影響で変更を余儀なくされた。最終的に決まったメンバーのうち、リシャル・ピナス氏については秋田昌美氏自身からの提案だった。調べてみるとピナス氏は1970年代に哲学を専攻し、ジル・ドゥルーズやジャン＝フランソワ・リオタルの授業を直接受けるなど、とても興味深い経歴を持っていた。バラージ・パンディ氏は年齢は若いですが、すでに評価の確立された音楽家である。



オンラインで実施したKEXディレクターチームへのインタビュー

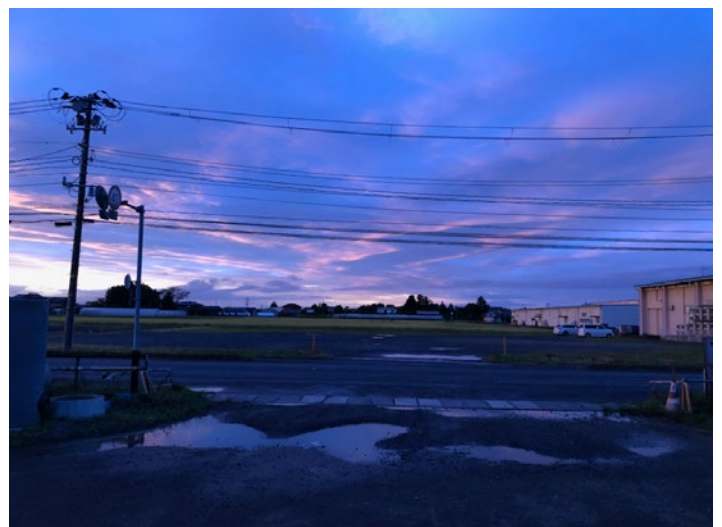


志賀氏のアトリエ内部(正面の白壁に制作中の映像を投影)

アーティストの作業

本企画の特徴は、参加する音楽家が、いずれも即興を本領としている点である。そのため、国際共同企画といっても、全員が長期間にわたってひとつのパッケージを作り込んでいくタイプのものではない。最も濃密な「即興」を本番で生み出すために、事前に何を、どのようにシェアすればよいか。あるいは何を、あえてシェアしないほうがよいか。7月22日の時点で、音楽家たちには志賀氏の基本的な資料が送られ、よい反応が得られていたが、それ以上に踏み込んだやり取りは(あえて)なされていなかった。

「ビジュアルコンサート」という形式上、ライブセッションの鍵となる志賀氏の映像素材制作が、まずは作業として先行していた。その点について話を聞いたため、9月20日に、筆者は志賀氏のアトリエ(宮城県)を訪問することができた。彼女のアトリエは元パチンコ屋の大空間で、本番のスクリーン(22×7m)をほぼ原寸大で取ることができる。本番で使用する映像素材はほぼ完成しており、1本のタイムライン上に、11のレイヤーを持つ16のシークエンス(それぞれがループ構造になっている)が並んでいる構造を、図で説明してもらった。この基本的なストラクチャーを、本番ではライブ演奏に呼応して、DJのように即興的に操作していく予定だという。幸い、基本となるレイヤーを用いた映像クリップ(約50分)——ミュージシャンには9月2日にすでにデータで共有済み——を大スクリーンで見せてもらうことができたが、その迫力は圧倒的だった。



アトリエ周囲の風景

志賀氏のこれまでの写真作品は、ほぼすべて「静止画」だった。本企画の打診を塚原氏から最初に受けた時、志賀氏は「映像（動画）」という新しい挑戦に取り組むよいタイミングだと感じ、実に3年間、さまざまな撮影実験に継続的に取り組んできたのだという。彼女は自身の写真作品を、「一息でイメージに撃たれるようなもの」と表現する。これまでは、「思いがけないことが起こること。向こうから何かやってくるということが必ず起こる。それを信じて、いかにその瞬間を迎え入れることができるか」に願いを込めてきた。そのため、写真集にせよ展覧会にせよ、ある写真と別の写真のあいだには瞬間（一息）と瞬間（一息）の〈あいだ〉に飛躍やギャップがあり、それが観客の想像力を促すトリガーとなっていたと思う。けれども映像（動画）では、〈あいだ〉の時間を形にしなければならない。そこに今回の挑戦がある。これまで不可視のギャップとしてのみ表現してきた〈あいだ〉の時間（物語性）をあえて表現してみることで、東日本大震災から経過した11年という時間性や、自分の写真行為を見直すまたとなり契機のように感じている。——やや乱暴に要約すれば、彼女の話は上記のような内容であった。

志賀氏は、塚原氏と同様、10代の頃からメルツバウを「崇拝していた」という。筆者が訪ねた日は、ピナス氏の音楽を大音量で流しながら映写してもらった。「バラージのドラムが入ることも想定しながら映像編集集中」だという。日本の大都市では維持することが不可能な大空間のアトリエを活用しながら、繰り返し実験を重ねてきたのであろうザラザラした感触の圧倒的映像を全身で浴びながら、筆者には本番の「イメージ」が、志賀氏のなかで確実に立ち上がりつつあることを実感できた一日だった。



志賀氏のアトリエ全景